

教職大学院 Newsletter No.151

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2021.8.20(公開版)

児童一人一人の可能性を伸ばす意図的・継続的な 指導を目指して

岐阜聖徳学園大学附属小学校 校長 水谷 啓

本学は1972年に岐阜県初の私立小学校として開学しました。「優しく強く、賢さの膨らむみ仏の子」を学校の教育目標に掲げ、一人一人の可能性を伸ばすことができるように、子どもたちに寄り添い歩み続けています。来年度で50周年を迎えます。学校の教育目標にあるやさしい子は、自分を見つめ仲間に優しくする子<徳育>つよい子は、できるまであきらめない子<体育>かしこい子は、自分で感じ考え見つけていく子<知育>です。仏教精神を基調とした学校教育を行い、聖徳太子の「以和為貴」(和をもって貴しとなす)の聖句をその象徴として掲げ、「平等」「寛容」「利他」の大乗仏教の精神を体得する人格の形成を目指しています。

今年度は、「児童一人一人の日常の生活の中に笑顔があふれ、規律と感動があり、夢を抱き、附属小学校で育ったことを誇りに思える」学校づくりを目指して、全職員が一丸となって教育活動に取り組んでいます。そのために、次の三つの心を大切に積極的に行動できる附属っ子を目指しています。

○「感謝の心」を大切に！

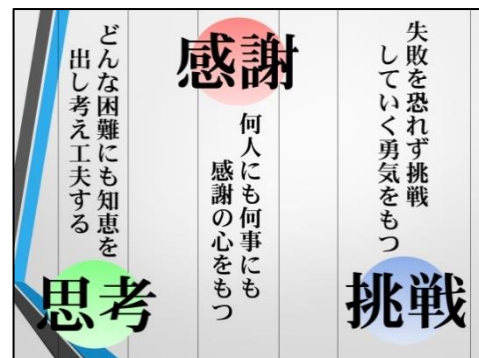
人間は皆、愛に支えられて生きています。何人にも何事にも感謝の心をもつことが大切です。

○「考える心」を大切に！

困難な事に対して、「知恵」を出し、考え工夫すれば困難を乗り越えることができます。

○「挑戦する心」を大切に！

自分を理解する勇気と挑戦する勇気です。何事にも、失敗を恐れず挑戦していけば、必ず道は開けてきます。



6年間学んだゴールとして、「志をもち、どんな困難なことに対しても知恵を出し勇気をもって立ち向かう」逞しい附属っ子に育つ事を願っています。

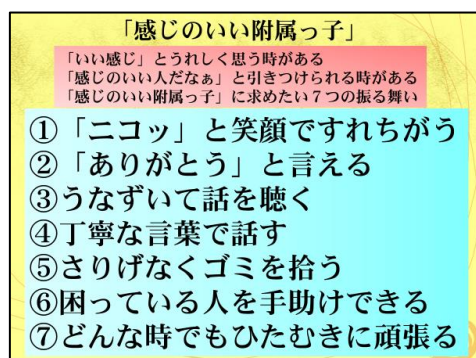
さらに、具体的な行動目標として、笑顔があふれ、規律・感動・夢のある学校にするために、「感じのいい

内容

巻頭言	(1)
スタッフ自己紹介	(2)
院生自己紹介	(5)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(16)
金曜カンファレンス報告	(21)
ラウンドテーブル 2021SummerSessions 振り返り	(24)

い附属っ子」を掲げています。「いい感じ」とうれしく思う時があります。「感じのいい人だなあ」と引きつけられる時があります。「感じのいい附属っ子」に求めたい七つの振る舞いを身に付けながら、成長することを期待しています。

①「ニコッ」と笑顔ですれちがう ②「ありがとう」と言える ③うなずいて話を聴く ④丁寧な言葉で話す ⑤さりげなくゴミを拾う ⑥困っている人を手助けできる ⑦どんな時でもひたむきに頑張るです。



本学では、一人一人の個性を伸ばすために、多様な学びを保障し、色とりどりの文化の花が咲いています。附属小学校の文化とは、『活動に込められた願いや思いがあり、継続的に繰り返し行われ、それが生活

の一部として根付いている。』ことです。そこには、かけがえのない大切な仲間がいます。

具体的には、日本古来の伝統文化を体験し、先人の知恵や心構えを学ぶ伝統の時間。全学年週3時間の英語の授業（ALT）やニュージーランドの姉妹校とのテレビ会議での交流等。プレゼン・プログラミングに挑戦し、情報モラル、情報活用能力を育成する週1回の情報の時間。仲間と協力する大切さを学ぶ宿泊校外学習や運動会等の行事。挨拶、掃除、給食、図書、縦割り遊び等、自主性や感謝の心を学ぶ日常の委員会活動。本物に触れながら学ぶアフタースクール。等です。

私たち教職員は、指導の成果を児童の姿で具体的な事実として示す事を心構えとしてもち、全校の児童に、次の4つのメッセージ<①意味ある事、価値ある事に頑張る子には、とことん応援します。②頑張っている友達の足を引っ張る子には、全員で指導します。③困ったことがあったら、一番相談しやすい先生に相談しなさい。④どんな事でも相談されたら、すぐに解決に向けて全員で指導します。>を先生方の決意として伝え実践を進めています。

スタッフ 自己紹介

傾聴時々語り Part II

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー

牧田秀昭



令和3年3月31日
23時40分、私は福
井市安居中学校の校
長室にいました。あ

とわずかで教職生活が終わるタイミングで、諸先輩
方が言及していた分水嶺のような瞬間の気持ちを私
も半信半疑で確かめてみようと思ったのです。時計
が0時を示したときに訪れた、肩の荷が下りた安堵

感、やり切ったという充実感、もうここに居場所はないという空虚感は、なかなか言葉で伝えられません。振り返れば、我儘を言いながら結構教職生活を楽しんできたと自覚していましたから、正直このような感情の生成は予想外でした。思っていたより重圧がかかっていたということでしょうか。普通なら「ひとり酒場放浪記」に出かけるところなのでしょうが、このご時世では仕方のない「ひとり家飲み」に、かなりの時間と酒量を費やしました。

さて、校長室にいと、この部屋に入ってきた人の顔が次々と思ひ起こされました。つい先日の離任式に駆けつけてくれて「まだまだ話し足りないんです」と言って中学校時代の思い出話をする卒業生たち。卒業式の日、PTA 役員からの何枚もの寄せ書きの色紙に一升瓶を添えて持ってきてくださった PTA 会長。「コロナ禍でも学校祭ではせめてこれくらいはやらせて下さい」と訴えてきた生徒会執行部。

「気象予報士を呼んでこんな学習をしたいんです」と、学習課題をグルーピングして書き込んだ模造紙持参で説明に来た 2 年生。そしてプロジェクトの詳細を起案・報告するため繰り返し訪れたたくさんの生徒たち。もちろんこの裏には先生方の働きかけがあったことは容易に想像がつかます。以心伝心となった先生方も次々と校長室を訪れました。「こんなプロジェクトを考えているのですが、生徒に持ち掛けていいのでしょうか」と常に先手を打つ K 教諭、

「今の時点ではまだ不確定な部分が多いし、悩みもありますが、とりあえず現状を聞いてもらえませんか」と用意周到に策を巡らせる T 教諭、「なぜ校長はそんなに軸がぶれないんですか」と詰め寄ってきた T 教諭、「ちょっと聞きたいことがあるんですけど」という割には大難問をぶつける K インターン生、「次の研究会はこれでやります!」と、いつも大胆な案を提示する I 教諭、…。いずれの場合も私は「傾聴時々語り」で、楽しく（失礼かもしれないけれど、実際に面白い!）話を聞かせて頂き、明確な回答を切望していると感じたときだけはお答えしたものの、大抵はやりとりや議論の中で、ご自身で解や検討事項を見つけて部屋を出ていかれるのでし

た。そんな頼もしい皆さんのこれまでの支えに感謝、感謝です。

新年度からは、10 年ぶりに教職大学院のスタッフとしてお世話になっています。そして相変わらずこの 3 か月間でも大変面白い話を聞かせてもらっています。

コロナ禍で行事が中止や変更を求められる中、生徒と教師集団の温度差にどのように折り合いをつけていくか、悩みながらの日々を赤裸々に語ってくれた方がいらっしゃいました。何のための行事か、伝統とは何かを悩み、語られる中、私は、子どもの尊厳を守ろうとするその先生の姿に感動しました。また、当たり前だと思っていた、ルールを守らせてつけていくこれまでの実践を振り返り、子どもたちを教師に合わせるのではなく、配慮をしながら一緒に活動し、考えていくことの重要性に気付いた先生のお話をお聞きしたこともありまし。ご自身のことだけでなく、グループ内の先生方の話を聞きながら丁寧に語られている姿は、教職大学院の目指す姿そのもののようでした。ストレートマスターの院生の方々が、授業の見方や参観記録の書き方等について、『授業研究』を参考文献とし、プレゼンにまとめながら議論を続ける複数回のカンファレンスにも同行しました。M2 の素晴らしいリーダーシップのもと、目の前の現場の実践に向き合い、協働で授業観を構築していく活動は、まさしく探究と呼べるものでした。福井の教育界の未来は明るい!

もちろん、悩みは尽きず、教職員の協働の重要性は理解できてもなかなか動いていかない現実、探究的な学びは頭で何となくわかっているても受験の波に流されていく現実、授業第一だとわかっているても生徒指導や部活動にウエイトがかかりすぎてしまう現実等、幾多の困難が壁のように立ちはだかっています。しかし、それらも含めて、特効薬ではないにせよ、カンファレンスの営みの中で、自明のことと疑いもしなかったことが崩壊して新たな地平が生まれ、挑戦への活力がみなぎる瞬間に遭遇すると、

「傾聴時々語り」の価値を実感します。また、架橋理論の充実、記録を蓄積していくことの意味の明確

化の他、FD の位置づけがクリアに語られているのを目の当たりにし、単なる規模の拡大ではない教職大学院の充実と発展を感じています。この尊い実践と省察のコミュニティの片隅に居させてもらえるこ

とに感謝いたします。これからもよろしくお願いいたします。

福井大学連合教職大学院 コーディネートリサーチャー

谷 裕子



こんにちは、今年度からコーディネートリサーチャーとして勤務させていただいております、たにひろこです。

1年生の皆さん、初めましてどうぞよろしくお願いいたします。そして2年生、3年生の皆さんは改めましてよろしくお願いいたします。といいますのは、昨年度(令和2年度)は、教職大学院で育休代替教員として勤務させていただいており、今年度は、非常勤のかたちで勤務させていただいておりますので3月に退任のご挨拶をし、また今回新任の挨拶をさせていただいているというわけです。

私は、40年間公務員として幼児教育の現場で勤務してきました。そして、「幼児が自ら遊び、学ぼうとする保育」とはどういう保育なのか、それには保育者はどのような援助をすればいいのか、ということを職員と共に考え、学び、実践してきました。

昨年春の新任のご挨拶文の中で私は、たくさんの幼児教育の現場で、悩みながら実践をしている保育者に会うことを楽しみにしている。そして異業種の先生方にお会いしてお話を聞き学ばせていただくことを楽しみにしている。と書きました。コロナ禍ということで、実践の現場には多くは行けませんでした

が、それでもいくつかの保育実践の現場に伺うことも出来ましたし、院生さんとのカンファレンス、教育総合研究所での教育実践研修のファシリテーター、ラウンドテーブル、そして高校生の皆さんの探求の実践などの場を経験させていただき自分自身が思っていた以上に多様な学びをいただくことが出来ました。カンファレンスの前はいつも緊張し、不安な思いもありつつ参加するのですが、終われば私自身に学びがあり、楽しかったと感じるのです。皆さんが様々な現場で、真摯に子ども達と向き合い、悩み、迷う中でされている実践は本当に貴いと思うのです。そんな皆さんに感謝と尊敬を感じ、時には心が沸き立つような思いに駆られることもあり、私自身いつも元気をいただいているのです。

幼児教育の現場しか知らない私ですが、教育の現場にはやはり共通するものが多くあるのを実感しています。そして、先日のラウンドテーブルでは、介護の現場においても同じように様々な形の配慮や援助があることを実践者の方からお聞きすることができ、学びと共に得もいわれぬ感動をいただくことができました。

皆様との様々な出会いに感謝し、頂いたご縁を大切にしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

院生 自己紹介



渡辺邦彦 わたなべ くにひこ

今年度、学校改革マネジメントコースに入學しました渡辺邦彦と申します。昨年度は、県のマネジメント研修を受講しました。この研修とのつながりで、今

年度、福井大学連合教職大学院にて学ぶ機会を得ることができました。かつては自分には縁がないと決めつけていた教職大学院でしたが、今、こうして在學していることにとても感謝しています。

教員に採用されてからの二十数年間、私は小学校や中学校で担任として勤務してきました。「教師になろう」と奮闘した初めのころ。教育は共育だ、と勝手に思い込んで、とにかく子どもとよく遊び、同僚の先生、先輩の姿を見て、尋ねて、学んでいたように思います。道徳の研究大会を控えて全職員が丸となって勉強し、様々なやり方で授業実践をして学び合ったのが今でも思い出されます。先生方の支えをいただいて、初任校でしたが無事に代表授業を終えることができました。このことは、その後の教員生活において大きな自信となりました。中学校に異動してからは、徐々に「授業が命。理科教育を追求しよう。」と、様々な指導法を開拓しました。他にも、学年部会や生徒指導部会(生徒会)など、様々なコミュニティ、熱いチームワークを経験させていただきました。さらに、部活動や進学指導など「1日、24時間では足りない」くらいの、忙しいけれども充実した日々を過ごすことができました。

その後の小学校勤務では、校務分掌上の〇〇主任、例えば学年主任や体育主任、研究主任といった、ミドルリーダーとしての役割を任せていただくようになりました。しかし、体育主任としては失敗をいく

つも経験し、学校全体を動かすことの難しさも痛感しました。研究主任でも、授業研究の視点が絞り切れず、これまた、リーダーシップどころではありませんでした。先輩を追いかけていたはずなのに、いつしか自分がその立場になりつつある。焦りを感じながら、目的や時代のニーズに応じて学びつづける重要さに気が付き始めたのが、このころでした。

かつて同じ学校で勤務して仲良くさせていただいている先輩の先生方が、福井県教育総合研究所でのマネジメント研修を受講されていることを知りました。マネジメントとは何か。担任をしている自分は当初、全くピンときませんでした。しかし、役割によって学校全体のことを考えるようになるにつれ、自分に足りないことの多さを実感し始めるようになりました。そして管理職に促され、自分もこの研修を受けてみようという気になっていきました。さらに、この研修が福井大学の教職大学院と連携していることを教えていただいたのです。「意思のある所に道ができる。」自分に足りないものが何なのか、今でもよくわかっていないのですが、とにかく拓けた道を進んでみよう、ということで入学しました。

学校拠点方式ということで、学校に勤務しながら学べることも、とても魅力的です。自ら学ぶ環境に自分を置いてみる。今まで読んだこともない、しっかりと理論書をじっくりと読む。先輩方の実践報告を読ませていただく。そして、大学院の先生方をはじめ、全国各地の様々な立場の先生方と語り合い、自分の実践を見つめなおす。昨年来、依然としてコロナ禍ではありますが、子どもの学びと同様に、私も少しずつ学びを進めていきたいと思います。昨年夏の講座では、天方先生から「理論と実践の往還」という言葉を初めてお聞きしました。これぞまさに大学院の学びであると教えていただきました。これ

からもさらに新たな出会い、新たな学びが待っていると
思います。どうぞよろしくお願いいたします。



多田昌代 ただ まさよ

今年度から学校改革マネジメントコースに入学しました多田昌代（ただまさよ）と申します。「多」は「多」の旧字体です。

「多田」の姓になり22年が経ちますが、「ただ」となかなか呼んでもらえません…（我が家のみんなが経験済み…）。でも、私はこの「多田」がとても気に入っています。みなさん、どうぞ覚えていただき「ただ」と呼んでください。

「先生になりたい！」そう思ったのは小学校の頃。高校卒業時の文集には「4年後、教壇に立っていられたらいいな。」と綴ってありました。大学は県外の大学へ進学し、卒業と同時に福井大学大学院へ入学しました。当時の教育学研究科学校教育専攻で、試験に備える学習や試験の結果だけによる評価の弊害を明治から大正の試験史を紐解き、福井県の三国尋常高等小学校における実践を手がかりに、子ども本来の学びを評価する試験の在り方を探りました。また、この頃は小学校1・2年生で生活科が新設された時期で、伊那小の実践を読み研究会に参加して豊かな学びを支えるサイクルについて学ぶことができました。同じ専攻の同期は私を含め3人で、お一人は福井大学附属幼稚園の先生、もうお一人はジェンダーフリーを研究している方でした。現場の経験を省察しながら話したり、自分の考えのよりどころとなる研究とつなげて語ったりする2人のエネルギーな姿に圧倒されながらも刺激を受け、2年間の院生生活を修了することができました。年齢やフィールドの異なる仲間との出会いと学びは貴重な経験となりました。

そして、「4年後」ではなく6年後になりましたが夢を叶え、私は教員になることができました。それから26年間、ずっと敦賀市の小学校で勤務しています。今年度からは、福井県で初めて施設一体型小中一貫校となった角鹿小学校で勤務しています。3月までは統合される前の敦賀北小学校に6年間いました。この6年の間に統合への準備を進め、閉校と引っ越しを終えて、約180人の子どもたちと一緒に新しい角鹿小へ来ました。敦賀北小学校から角鹿中学校へ進学した中学生とも再会し、中学生として頑張っている姿を感慨深く見守っています。木の香が心地よい校舎で、1年生の担任として毎日楽しく生活しています。

さて、3つの学校が1つになり、1学年2学級編成、そして中学生もいる新しい校舎での生活は、これまで単学級で過ごしてきた子どもたちにとって大きな環境の変化でした。それは私たち教員にとっても同様で、これまでより多くの教員、そして中学校の教員とも関わりながら新しい学校をつくっていくことに、少なからず不安を抱えていました。そこで私は教職大学院で「施設一体型小中一貫校における協働」をテーマに学びを深めていきたいと考えました。せっかく小学校と中学校が同じ学校にいるのだからお互い仲良く学び合い、子どもたちのためにいい学校をつくっていきましょう！と思ったのです。しかし、すぐに壁にぶち当たりました。同じ建物にしながら小学校教員の放課後は中学校教員が部活の指導。時間のマネジメントの難しさを感じています。そんな思いをこれまでのカンファレンスでつぶやいたところ、グループの皆さんやファシリテーターの先生からヒントをいただきました。

- 実践は、うまくいなくて当たり前。
- 一人で何もかもしようとせずに、誰かに力を貸してもらうことも大切。
- 周辺のメンバーをどう巻き込むのが大事。渦にするには実践の「見える化」を。
- ジレンマを解決すべく考えることがマネジメント。
- 今している省察が未来への自分のエールになる。

みんなと一緒に！と大旗を振ろうとしていた自分に気がつき、小さなコミュニティから始めるという

視点の転換をはかることができました。また、先輩方の長期実践報告を読むと、壁にぶつかった時の教職大学院の先生方との会話がありました。私はそれを“ポジティブ語録”としてまとめてみました。（次に掲げるのはほんの一例です。もっとあります！）

まだまだこれからいくつもの壁に当たり、悩み、省察しながら進んでいくでしょう。そんな時はこの語録を支えとしてがんばりたいと思います。また、角鹿中には教職大学院を修了した“先輩”が2人います。このような恵まれた環境の中で教職大学院生として学ぶことができることを幸せに感じ、2年間がんばっていきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。



谷口 隆一 たにぐち りゅういち

今年度から学校改革マネジメントコースで学びます。学校を経営する素養や専門性を身に付けて、万が一管理職に就けたときにきちんと仕事が

できるように、またそれが叶わなくても、担当する各部署で助力できるようにと考え、学究肌ではないのですが志望しました。毎回皆さんと語り合うことが楽しみです。先日は「校長を補佐するとは」という話題で、「ハラスメント等の問題を出さない。それがひいては校長・学校・地域を守る」というお話や、的確な指示や校内把握、また法律に通じていることも大切だというお話を聞きました。これから宜しくお願いいたします。

今まで出会った生徒、同僚、管理職からは多くを学びました。時系列で紹介することで自己紹介に代えます。

3つの高校で13年間、中学校で3年間（ともに担当は英語科とサッカー部）、2つの特別支援学校（途中、日本人学校小学部に3年間）で15年間勤

務しています。「学力・体力・思いやり」を念頭に教育活動を行ってきたつもりですが、振り返ってみると、「学力」に関して、自分は話し下手で丁寧な授業ができず、授業が雑であったなあ、生徒を一人ひとりしっかりと見ることができていなかったなあ、と恥ずかしくなります。

ただひとつ、「思いやり」に関しては、「自分を大事にして他者も尊重する」ということを、生徒に伝えてきたように思います。初任者研修で受けたグループエンカウターの講義はとても刺激的なものでした。以来、「思いやりは・・・出会い、触れ合い、助け合い」というテーマで授業や学級経営をしてきました。「触れる」とは、広く一般に告知知らせることも意味するから、互いの考えを伝え合うことは「触れ合う」ことだと言われました。英語の授業では「自己表現文」に触れ合ってお互いを認め合い、peer pressure（仲間がいることで感じる精神的な圧迫という意味で当時は捉えていました）を減じたいと考えていました。昔から親父ギャグで皆から引かれるのですが、初めて担任をした1年1組のクラス目標は「笑って11友」。先生方を順に朝の会に招いて話を伺ったり、学校祭では、クラスター

マ「薫っていい友」のもと、地域の年配の方から、わら縄やわら草履の作り方を習って作品を展示しました。

国際科クラスの生徒は、留学生や海外交流先の生徒と接する機会が多くありました。自分も ALT の皆さんと楽しく交わることができました。「異文化理解と言われるが、人間として共通するものの方が多い。他者を尊重しよう。」という指導主事のお言葉が印象深く、折々に生徒に伝えました。ただ、韓国男性のホームステイを受け入れたとき、十分な食事を用意できずに失望させてしまいました。悔やんでいると、9年後、日本人学校の派遣先が偶然ソウルに決まり、休日に最初に探したのは彼が家族と住むアパートで、どこまで伝わったかは分かりませんが、謝ってきました。

さて、そのソウル日本人学校の校長（熊本出身）は、「担任時は、例えば黒板消しの丁寧さなど、児童のいいところを褒め、仕事を任せ、力を伸ばした」というやり方で教員にも接してくれました。

「小学校での指導技術はないが、それ以上に大切

な子どもに対する情熱は負けていない、毎日子どもと一緒に外で遊んでくれてありがとう」の付箋で明るい気持ちになったもので、今でも自分の宝物です。

「あいさつ、歌声、外遊び」を学校目標に掲げられました。「まずは明るい声で。それから、立ち止まって言えるといい。次の段階は、挨拶のあと心の中で今日も一緒にがんばろうなどの気持ちがもてると素晴らしい」という教えも心に残っています。重視した集会活動ではスピーチや学年毎発表、全員合唱を行いました。「歌声」を使って学校をまとめられていました。音痴の自分は歌声では貢献できませんでしたが、「外遊び」は苦ではなく、校長に褒められていい気にもなり、中休みや昼休みには中学年の子どもと毎日のようにどろけいやボール遊びをしました。齋藤孝教授の著書が好きで、小学生は国語と体育が特に大事という言葉も頭にあって、国語の学びと運動は大切にしました。子どもが明るくたくましく成長している様子を見て保護者も学校をさらに信頼するようになったと感じました。

鈴木 将乗 すすき まさのり

今年度より、福井大学連合教職大学院・学校改革マネジメントコース（1年履修）に入学しました、鈴木将乗です。現在、福井市西藤島小学校に勤務し、教務主任を務めています。よろしくお願いします。

教員生活の1年目は、附属中学校で講師として歴史を教えました。教員の正式採用の勤務先は、県立病院に隣接する県立福井東養護学校（現：県立福井東特別支援学校）でした。その本校に1年、福井大学医学部の中にある五領分教室に2年勤め、次は、福井市光陽にある県立福井養護学校（現：県立福井特別支援学校）に2年間勤務しました。養護学校の雰囲気は、子ども達や教員にとってとても温かいものでした。今でも、教育の原点は、障害児教育にあると思っています。

しかし、社会科を専攻していた自分にとっては、「社会科を教えたい。」という気持ちがあり、義務制への希望を出しました。次の勤務先は、坂井地区の丸岡中学校でした。今は廃校になっている竹田分校で2年間勤め、中学校1、2年の担任をしました。経験したことのない女子ソフトテニス部の顧問をして、竹田の山を車で降りて福井市に戻っていくと、夜も遅く、養護学校にはなかった事なので、慣れるまでとても辛かった覚えがあります。竹田分校勤務の後、本校に5年間勤務しました。その時の丸岡中学校本校は、生徒の数は千人を超えていて、各学年10クラスずつあるマンモス校でした。自分は5年間の間に、中1～中3の学年それぞれを担当しました。

丸岡中学校 7 年間勤務の後、福井市に戻り小学校に勤務したいと希望を出しましたが、次の勤務先は、福井市の光陽中学校でした。県立福井養護学校の近くだったので、この地区に御縁を感じました。しかし、当時の光陽中学校は学校が落ち着いていませんでした。学校を変えるために、管理職の強いリーダーシップのもとに教職員が一丸となって、中学校区の小中連携や小小連携などの「魅力ある学校づくり」を行っていきました。勤務は5年でしたが、とても濃密な経験ををしたと思います。次に、その小中連携として、同じ中学校区にある足羽小学校に勤務しました。初めての小学校でしたが、学年主任、特別活動主任、生徒指導主事、研究主任、道徳主任（道徳推進教師）を経験させていただくことができました。勤務最後の年には、道徳主任として、よりよい学校づくりのために、研究部や低・中・高学年部会を中心に先生方と協働して、道徳の研究を推進していくことができた実感しています。

今年度からは、福井市西藤島小学校に勤務し、教務主任を務めています。異動してきたばかりの学校で、初めての教務主任なので、仕事をこなすのにとっても大変な毎日を送っています。しかし、教務は時間割の管理や行事の日程調整など、学校をマネジメントしていく立場にあるので、学校全体をみる視点ができることも勉強になっています。

このように、20 数年に渡りいろいろな校種を経験してきました。今年度は、教職大学院で学ぶ機会を得ることができて、自分のこれまでの教員人生を今一度振り返り、省察していきたいと考えています。4 月からの月間カンファレンスでは、いろいろな立場の先生方と話をする貴重な時間を過ごすことができ、自分がもっていない学校マネジメントの視点をいろいろと学ばせていただいています。ここで学んだことを、よりよい学校づくりのため、これからの教員人生に生かしていきたいと考えています。これからも御指導をよろしくお願いいたします。

渡邊 本樹 わたなべ もとき

2021（令和 3）年度に学校改革マネジメントコースに 1 年履修で入学しました渡邊本樹です。よろしくお願いいたします。私は 2017（平成 29）年より 3 年間、福井県教育庁教育政策課にて教員研修に係る業務を担当しました。その中で県教育委員会と福井大学教職大学院が連携して教員のライフステージに寄り添い、その節目節目に研修を行う、福井県独自の教員研修に係る業務を担当しました。ちょうど 2017（平成 29）年 4 月に教育公務員特例法が改正となり、任命権者には教員等の職責、経験及び適性に応じて向上を図るべき資質能力に関する指標の作成が求められたタイミングと重なり、「福井県教員育成指標」の作成に関わることになりました。教員の生涯の学びについて改めて考える中で、自分自身も教職大学院の学びに身を置いてみたいという思いを持ち、2020（令和 2）年に藤島高校に転勤したのを機会に、教育委員会が行う 1 年間のマネジメント研修の受講を経て、教職大学院で学ぶことを決意しました。

私が福井県で 1994（平成 6）年に教員として採用されてから今年は 28 年目になります。県立高校の国語科の教諭として 16 年の勤務を経た後、その後の 10 年間は、教育行政の立場から様々な業務に関わってきました。県教育研究所に 2 年、県教育庁高校教育課に 4 年の勤務を経て、文部科学省初等中等教育局学力調査室、独立行政法人大学入試センターに 1 年間出向し、全国学力・学習状況調査や高大接続改革、大学入学共通テスト、新学習指導要領の改訂に係る議論にも一担当者として直接関わってきました。帰福後は県教育庁教育政策課に 3 年間勤務し、教員研修に係る体系の整理、業務改善の視点からの研修の削減に取り組むとともに、2019（令和元）年 10 月の「教育に関する大綱」、2020（令和 2）年 3 月「福井県教育振興基本計画」の作成にも関わりました。

そして昨年、2020（令和 2）年度、10 年ぶりに藤島高校で教壇に立つことになりました。教職大学院へ

の進学を視野に、在籍する藤島高校のカリキュラム・マネジメントと教員コミュニティの醸成をテーマに、次世代の学びを深めるためのカリキュラムのあり方について研究を深めることを目標に自身の日々の実践を通して取り組みました。

藤島高校は 160 年を超える歴史と伝統を持ち、生徒、教員、保護者、地域社会からの大きな信頼の中で教育活動を行うことができている伝統校です。文部科学省スーパーサイエンスハイスクール事業（以下、SSH）に 3 期 15 年にわたって取り組み、2019（令和元）年度より 4 期目の研究指定を受けています。私は校務分掌として SSHを担当する企画研究部に所属し、この長い研究指定の道のりを振り返る中で、公立学校の教員には必ず転勤があり、学校コミュニティは生徒のみならず教員も変化し続けなければならない組織であるということを実感しました。SSHの長期の取り組みを通じて、学校文化が継続して発展、進化し続けるために必要なことは何か、研究してみたいと思いました。

高校は 2022（令和 4）年度の入学生より新しい学習指導要領による教育課程が始まります。また福井県は全国に先駆けて巨額を投じて全県立高校に Chromebook 端末を一人一台配備（令和 2 年度時点で配備したのは全国で 12 県）しました。2020（令和 2）年度、私は久しぶりの授業を行うにあたり、自身に課したことがあります。それは担当する全てのクラス、授業において、生徒が主体となる単元設定をすることとその記録を取ることです。その実践を積み重ね

るにあたり、Chromebook やスマートフォン等の ICT 機器を活用することは必要不可欠でした。この授業改善の取り組みについて、Google for Education が 2021（令和 3）年 3 月 27 日に開催した「高校向け教育 ICT セミナー～群馬県・福井県の事例から学ぶ～」で実践報告したほか、先のラウンドテーブルでも報告をしました。ICT 機器を授業の場に持ち込むことで、教員と生徒、生徒相互の共有の場が格段に広がること、ICT 機器を用いた仮想の場でさらに深い思考の場が拓かれることを、実際行った授業の場面を紹介しながら提案することができました。

自分にできることは教育の大きな変革期にカリキュラム、授業の実践を通して研究を進め、提案し続けることだと考えていましたが、青天の霹靂、わずか 1 年の勤務で 2021（令和 3）年度、再度県教育委員会への勤務を命じられました。現職では全ての県立高校の授業改善と生徒指導に係る業務を担当しています。研究の方向性の変更を余儀なくされ、今年度どのように 1 年履修で自身の研究を進めていくか、暗中模索のスタートとなっているところです。

教員人生の三分の一を学校外の立場で勤務することになったわけですが、様々な職場で勤務してきた（実際、職種が変わるたびに退職願も何度も書きました…苦笑）稀有な経験を、これまでの歩みを省察する中で捉え直し、その中で培われてきた自身の教育観についても振り返っていきたいと思っています。



渡邊 衣咲子 わたなべ いさこ

今年度より、学校改革マネジメントコース（1 年履修）に入学しました、渡邊衣咲子です。嶺南教育事務所研修課に勤務しています。一昨年度にマネジメント研修、昨年度に集中研修を受講し、ついに今年度大学院生となりました。教職について今年で 26 年

目になります。越前市の中学校で 3 年、敦賀市の中学校で 18 年、県外の義務教育学校で 1 年、行政職の今の立場について 4 年目。中学校での 21 年間は、ずっと担任をしていく中で数多くの失敗もし、子供や先輩教員から多くのことを学んできました。そして、担任という仕事、英語教員という仕事を通して子供と繋がる喜びを全力で味わっていたように思います。しかし、県外派遣で茨城県水戸市の義務

教育学校に行かせていただき、今まで自分の中心であった担任業務、そして英語教員としての業務がほとんどなくなってしまう、最初は大きく戸惑いました。私は何を学びにここへ来ているのか、しばらくは自問自答の日々が続きました。やがて、外から福井県を見る意味、県外の学校との違いを見つけ、それぞれの価値からよりよいものを生み出す意義、新たな繋がりを県外に生み出すありがたさを感じる事ができるようになりました。そして、今の行政職につき、学校とは全く違う仕事を始め、多忙な日々の中で学ぶ時間の十分とれない教育現場に、価値のある研修を提供することが今の職の使命だと感じ、勉強を積み重ねています。

昨年度の集中研修でこの26年間を振り返る機会をもちました。何が自分の考え方をつくりあげてきたのか、そこにどんな価値をみつけることができるのか。こんな風に自分の教員人生を振り返ったことはなかったので、とても有意義な時間となりました。

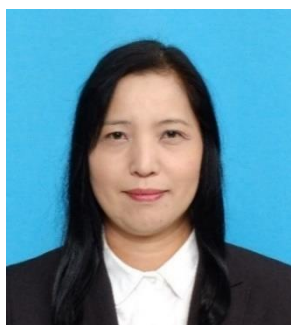
担任としての21年間、英語教員としての21年間、県外派遣の1年間、そして今、嶺南教育事務所研修課員として4年目。その4つの自分をつくってきた軸は何だろうと紐解いてみたときに、共通して見えたものは、「常に外と繋がり続ける自分」がいたことです。外に出ていろいろな価値観に触れたいという思いは英語教員を目指した自分にまで遡りました。外と繋がることを通して自分自身を見つめなおし、新たな価値観を築くことにワクワクする自分が常にいたように思います。

そして、2年前のマネジメント研修では、前任校の松陵中学校に協力校となっただき、スリンププログラム（名城大学：曾山和彦教授考案）という取組を提案し、マネジメントを学びました。この取組の魅力は、なんといっても負担感のない取組であること。業務改善が叫ばれる中、負担感のなさは大きな魅力です。でもだからこそ、一枚岩となって価値を共有して取り組み続けられる仕組みがないと、成果を出すことはできません。一枚岩となっ

て、目的を見失わずにみんなで楽しみながら進めていく事ができれば、じわじわ漢方薬のように効いてくる。成果をあげている県外実践校にも視察に行き、多くの学びを得ることができました。マネジメント研修を通して、マネジメントに必要な要素として実感した3点は、①負担感をいかに感じさせないか ②いかに取組をぶれさせないか ③いかに心に火を灯し続けるか です。このどれかが欠けると、形だけの実践や、目指すものがわからない実践となってしまう。でもそれがなかなか難しいということを含め、今あらためて実感しています。負担感くやりがいとするには、何が必要か。そんな学びを続けているところです。

毎月のカンファレンスを通して自問自答しながら、新たな学びを得ながら、今自分でみつけている答えは、どんな取組にもわくわく感が必要だということ。そして、描く未来を共有して、その道筋づくりにわくわくできれば、負担感くやりがいとなるということ。わくわくできる未来への今を楽しめるよう、そしてこの先の新たな学びにわくわくしながら、がんばっていきたいと思います。どうぞよろし

くお願いします。



南部 和江

今年度より、学校改革マネジメントコース(1年履修)で学ばせていただいております。現在、福井市春山小学校に勤務しています。特別支援学級を担当、特別支援教育コーディネーターをさせていただいております。よろしくお願いいたします。

昨年度は、県のマネジメント研修に参加させていただきました。教職大学院に向けての事前履修として、夏期や冬期には大学院の学びに参加させていただきました。教師生活も25年を過ぎ、3人の子育ても一段落し、以前から思っていました、大学院にチャレンジして学びたいという気持ちが沸いてきました。また昨春、福井大学の隣の春山小学校に異動になり、迷っていたところに、背中を押されたような感覚になりました。さらに県のマネジメント研修を受講した際に、是非もっと深く勉強したいと思ったことが入学のきっかけです。人生百年時代と言われ、生涯学習を推進される昨今、まだまだ私は、人生の半分を過ぎたばかりだなと感じています。先日、担任している子ども達から、「先生も、宿題あるの?」と、聞かれることができました。実際には、月間カンファレンスに参加し、レポートを書いたり、本や論文を読んだりする時間が、以前よりも多くなりました。最近では、「先生も宿題があるし、毎日いっぱい勉強してるよ。」と自信をもって答えています。子ども達も、「ふーん、先生もお勉強あるんだ。どんな勉強?」と不思議そうにしています。一生勉強し、成長できる、学び続ける教師でありたいと思います。

もうすぐ、今年度も夏期集中講座が始まります。昨年度の夏期集中講座は、コロナウイルス感染防止対策のため、福井大学を横に見ながらのオンライン講習となりました。「コミュニティ・オブ・プラクティス」の研修では、久々に大学生のような気持ちで資

なんぶ かずえ

料をじっくりと読み進めながら、Zoomで院生の方々と語り合うことができ、新鮮な感覚を覚えました。資料をもとに、現任校の実践や課題、また自分の教職人生を一つ一つ振り返っていく、貴重な体験をすることができました。書き表すことによって、あの時はこう思ってた一生懸命やっていたけれど、今思えばもっとこんな風にできたのになと思うことや、あの時こう判断したり、相談したりして決めたことは、あれで良かったのだと思うことなど、たくさんのが蘇ってきました。一気に駆け抜けてきた教師生活も、一度立ち止まって考えることも大切なのだと、改めて感じました。一つ一つ整頓していく中で、学校全体のこと、現代の教育のこと、見えてくるものがたくさんあり、今自分が置かれている立場に責任と自覚を感じずにはいられませんでした。

また、私は特別支援教育コーディネーターとして、毎年保育士の方からお話を聞いたり、保育参観をさせていただいたりしています。以前から幼児教育について関心がありましたが、大学院でも、幼児教育に携わる方とセッションさせていただき、幼児教育の大切さを再確認し、新しい発見や気づきがありました。さらに、他の校種や職務の方、県内外の方、様々な地域の方、海外出身の方と話し合うことは、多面的な見方を知り、興味深く感じ取ることができます。

また先日は、教職大学院の先生方が、勤務校の児童理解研修会に来ていただいたり、担任している特別支援学級の授業の様子を見に来てくださったりしました。教職大学院の先生方との反省の際にも、児童について共通理解して、全職員で児童を支援していくとする勤務校の先生方の温かい気持ちと力強さを知りました。また、特別支援学級の児童に対する理解も進み、学校全体でサポートしてくださっていることを改めて感じました。

私は、大学院に入学するにあたり、一人で勉強しているのではないと思っています。教職大学院の先生

方がいつも私達院生の学びを支えてくださっていることに感謝しています。また日々、勤務校の先生 方の協力と理解を感じます。さらには、教職大学院入学を快く賛成してくれ、毎日協力してくれている 家族

の支えに感謝の気持ちを感じずにはられません。教職大学院での学びの時間や出会いを大切に、頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



鈴木 千文 すすき ちづみ

学校改革マネジメントコース（1年履修）に入学しました鈴木千文です。私はこれまで実業系の高校、普通科の進学校を経て、現在は坂井市にある丸岡高校で勤務しています。

本校は、地域との結びつきが強い学校です。保護者の多くが本校の卒業生であり、母校愛にあふれ、学校行事にも協力的です。生徒は素直で、強化部（サッカー、新体操、剣道）を中心とした部活動が活躍しています。本校の教育目標は、「身の回りの事象や地域の課題をグローバルな視点で捉えて行動し、自己実現を達成する」ことです。地域や社会と関わりながら主体的に行動し、自己肯定感を持った生徒を育成し、「地域との協働による生徒の自己実現達成」を目指しています。令和元年度より、文科省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定校として、魅力ある学校づくりに取り組んでいます。現在は、総合的な探究の時間を中心に、学校全体が地域と密接に関わりながら、探究活動を実践しています。本校での勤務7年目となる昨年の春、私の教員生活の中で転機が訪れました。文科省指定事業2年目となる昨年度、本事業の校内事務局を任されることになりました。そしてコロナ禍による臨時休校に直面し、何とか手探りで動き始めた頃、福井県のマネジメント研修に参加する機会をいただき、本年度、教職大学院の一年履修生として学ばせていただくことになりました。

「3つの種が出发点」

4月の合同カンファレンスで、①自分のこれまでの歩み、大切にしてきたこと、②現在の職場と課題について、③教職大学院で深めていきたいこと、という「3つの種」について考える機会をいただき、自分の中のスタート地点が見えた気がしました。まず①についてですが、入学前は、これまで自分が主に力を注いできたこと（教科指導、学級担任、学校行事、部活動）と、これから新たに取り組んでいかなければならないこと（事務局の仕事、学校改革）との違い、つまり担当する業務の違いから、これまでとは違うことをしていかなければならない、では何を目標に、どこから始めたらよいのか、と焦りを感じていました。「これまで」を振り返る余裕がなく、ただ目の前の、漠然とした「これから」にどう対処したらよいのかと考えていました。しかし、自分が積み重ねてきたもの、大切にしてきたことを振り返り、「これまで」と「これから」の自分に求められるものの間にある共通部分、さらにその延長線上を見つめることで「これから」を考えることができるのだ、という視点が、まさに出发点となりました。これまで時間と労力のほとんどを注いできた教科指導、学級担任、特別活動、部活動の中心は、常に「生徒」でした。生徒の活動に寄り添い、生徒が輝く場、主体的に活躍する機会を生み出すことが自分の原動力でした。そのために職場の同僚や保護者との連携により、生徒の充実した学習環境を保障できるよう心掛けてきました。そしてこれらは、自分が今置かれている立場でも同じです。手段（何をするのか）から、一貫性のある目標、展望（何

のためにするのか)に視点を向けることで、自分がとるべき行動を一つずつ見つめていきたいと考えています。

次に②の現在の職場と課題についてですが、地域密着型の普通科高校である本校の課題は、「学校の魅力化」です。行政・企業・NPO等と連携し協働して課題を解決し、地域の人々にとって魅力ある学校にすることです。昨年度は、(あ)学校の魅力化と目標共有、(い)情報発信と地域との連携の強化、(う)地域や海外との探究協働活動の推進と生徒の自己実現、の3点を重点目標に取り組んできました。成果は少しずつ見られるようになってきましたが、まだまだ道半ばです。本校の強み(素直な生徒たち、地域とのつながり)を生かし、どう魅力化を図るか、そのカギとなるのは、校内外の組織づくりです。

教職大学院では、「校内外の組織づくり、学びに必要な環境整備」というテーマを深めていきたいと考えています。「本校の魅力化」という課題に直面し、解決の糸口を探る中で、探究学習に対する共通理解と、探究活動を支えるさらなる組織的な環境整備が必要であると考えようになりました。そうすることで、本校で学ぶ生徒自身が、自己実現のために探究学習の必要性を理解し、本校の魅力を認識すること、そして自己有用感を持った生徒が校内外で積極的に活動することが、自然と情報発信につながると考えます。地域の皆さんの目に映る本校の課題や地域の課題を生徒と共有できる場、新しい学力観を共有できる場、生徒と教員が価値を共有できる場を構築し、生徒、保護者、教職員、地域の方々が魅力を感じる環境づくりに貢献できる自身の役割を見つめていきたいです。

原田 久実 はらだ くみ

今年度よりミドルリーダー養成コースに入学しました、原田久実です。福井市のさくら認定こども園で保育教諭をしています。今年度は主幹になり0歳児から5歳児クラスのサポートをしています。さくら認定こども園は子どもの主体性を大事に考え、主体的で対話的な深い学びを育んでほしいと6年前から遊びからの探究活動「プロジェクト保育」を行っています。小学校でいうと総合学習です。

「プロジェクト保育」を初めた時は頭の中では分かっている、実際に子ども達とプロジェクトを取り組んでみると、つい自分が子ども達を引っ張ってしまい、日々どうしたらいいんだろう？と悩みました。そんな時よく相談にのって下さったのが、教頭の伊藤仁美先生でした。又仁美先生から周りの先生へも伝わり「私もこんな時わからなかったよ」と共感してもらえたりアドバイスももらい一つずつを乗り越えるように取り組んでいきました。

今振り返ると、悩んでいる事が話せる職場だからこそ、乗り越えて前に進めたのだと実感しました。今

主幹になり職員が悩みを話せるような、安心して子ども達のつぶやきや学びを話せる環境をつくるのが私の役目なのではと思います。

長期実践報告は伊藤仁美先生の「自分も子どもも学び続ける保育実践の構築」を読ませて頂きました。

「さくら改革」その名の通り0歳児から5歳児までの基本的生活習慣、食事、排泄、日々の遊び、プロジェクト保育、年間の行事等、一つ一つに問題がありそれを園の職員や他園の先生、大学の先生に話し、子どもの声も聞きながら子どもたちの主体を第一に考え、自園の向上をいつも念頭に置き試行錯誤しながらも当たり前の見直しをされていた事に感動しました。

中でも私も記憶にある保護者のクレーム問題で、一つ一つの問題の壁にひとりでは考えるのではなく、「こんな事、保護者の方に言われてしまったんだけどどうしよう？」と職員みんなに投げかけ話し合い、問題解決していき、その時私は、「どうして問題ばかり起きるのだろうか？」と思いましたが、問題の壁に直面するということは、それだけ子どもを中心に考え

て一人ひとりの学びを大切にしているからだとの長期実践報告を読んで気づきました。又、問題を共有して共に考えるプロセスやコミュニティこそが「チームさくら」を作っているんだと仁美先生の計り知れない凄さを感じました。

「職員のチームワーク」「チームさくらである為には」と職員一人ひとりを大事に思い個々の意見が言いやすい職場作りを常に考え、仁美先生自身から歩みよって話しやすい環境作りを心がけていたことも恥ずかしながら今回この長期実践報告を読んで改めて気づきました。

合同カンファレンスでこのようなじっくりと振り返る機会をつくっていただき心から感謝します。

最後まで読み終えて「協働する」ということが強く見えました。仁美先生によると、

「改めて保育教諭同士の意見や情報交換が活発になりコミュニティの大切さ、チーム学校の意義を考えて、組織マネジメントについて再考された。保育現場は特殊で保育者がなんとか主任にはなるが園長にはなりたがらない。保育の現場は横並びで上に上がっていくモチベーションがないのだ。一般企業は役職が上がる事がモチベーションになるのに、特殊な

業界である。保育をし、子ども達と一緒に遊ぶ事が楽しいのであって、保育を見直したり後輩を育てる事は苦手だ。子どもは育てられても大人は育てられない。保育現場の組織づくりの特殊性、困難を切実に感じると共に、保育者は簡単に組織マネジメントできないし別物だと理解した。それだけに「組織とはなにか」、個人では達成することの出来ない目標を複数のメンバーが共同して達成することが大事であり、そのためにコミュニケーションを図ることが大切だと思う。それは好き勝手にやってはだめで、保育理念に向かう事が一番まとまると感じた。一人一人の職員がチームで協力し理念を達成する、一人ではできないし、組織として質を向上させるにはまず理念と理解の実践だと思う。と書かれていて、仁美先生の「実現したい未来」ビジョンがしっかりとあり、それをさくらの職員が共通で認識する、行き先が同じ方向だという事が一つ一つの問題を解決できる力になっていることがわかりました。

私に教職大学院は無理だ。私にできるわけがない。と思い不安でいっぱいでしたが、園長先生、伊藤仁美先生、さくら認定こども園に来て下さっている福井大学教職大学院の先生方、そしてチームさくらの先生方に背中を温かく押して頂き、今一段一段階段を登っているのだと思いこれからのさくらのために、子ども達のために頑張っていこうと思います。

まだまだ躓くこともあり、スタートしたばかりの教職大学院ですが色々な分野の先生方のお話をお聞きしたり、対話しながら吸収し学んでいきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

学びのペース

学校改革マネジメントコース2年／福井市安居中学校 **森阪 美文**

教職大学院入学と同時に現在の学校に異動してきました。スローペースの私にとって、教職大学院1年目は、新たな職場環境への順応と大学院での学びをうまく両立できず悩んでいたように思います。今思えば、目の前のことで一杯の毎日でした。そして、2年目に入り、1年目よりも、ほんの少し心にゆとりを持って、大学院での学びと日々の実践をつなげて考えられるようになってきました。カンファレンスで学んだことを生かしたいと思いながら日々生活しています。

先週は、指導主事訪問があり、異動順で私が研究授業を行うことになりました。10時間配当の単元で10時間目が研究授業に当たっていたのですが、大学院の先生方には、当日のみならず、事前の2時間の授業も見ていただき、授業内容や指導方法について、直接アドバイスをいただいたり、細やかなメールをいただいたり、zoomで相談に乗っていただいたりしました。昨年度より、依頼すれば授業を見てくださるとのことだったのですが、今回お願いしたら、研究授業当日も含め3回も足を運んでくださいました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。いただいたアドバイスを取り入れて授業を作り直し、当日の授業を行いました。私の経験したこれまでの研究授業は、校内の先生方から意見をいただいて、自分1人、もしくはALTと2人で考えて作り直す程度で、今回のように大学院の先生方のアドバイスを元に作り直すという経験は初めてだったので新鮮でした。

アドバイスの1つを受けて、担任の先生にも英語俳句を作っていただき一緒に授業をしていただくことになりました。当初の単元構想では、生徒一人一人が作った英語俳句を生徒同士でやりとり→遠隔授業

で他校の生徒と英語俳句のやりとり→LINEで生徒とALTの友人とのやりとりの予定でした。様々な人達との英語でのやりとりを通して、俳句の魅力について考えるものだったのですが、そこに担任も加わり、「共に創る授業」の輪がさらに広がることとなりました。そして、事前授業研究会に参加した生徒達、近隣の2校と合同で英語の授業研究をしているのですが、その先生方、ALT、本校教員、そして大学院の先生方、多くのアドバイスを元にできあがった授業は、本当の意味で「共に創る授業」になったのではないかと思います。私が至らない分だけ、たくさんアドバイスをいただくことができ、共に創る度合いが高まったことで、本校の研究主題「Agencyを育む学び～共に創るプロジェクト学習～」にふさわしい研究授業になったのではないのでしょうか。事後研究会で改善点も多く指摘されましたが、それについては今後の授業作りに生かしたいと考えています。この年齢になるとはっきりと悪い部分を指摘されることが少なくなってきます。けれども、大学院の先生方は率直にだめなものはだめと教えてください、それに気づき直すチャンスをいただけたことも、私の教員人生において貴重な経験となりました。

また、今年度のカンファレンスでは、以前に同じグループになった先生方と再度お話する機会が増えました。先生方の現在の様子をお聴きし、以前との変容を知ったり学んだりできるのは2年目ならではの楽しみです。また、今年度の開講式後の打ち合わせで、大学時代に同じ教育学コースで学んでいた五之治先生と同じグループになり、非常に懐かしく、また、うれしくなりました。かつて共に学んだ仲間と学

び直しができることに喜びとわくわく感を感じています。

職場では、昨年は2年学年主任だったのですが、今年も2年生を担当しています。本校は1学年1クラスの小さな学校です。前年度の2年生は、男子17人女子2人計19人と女子が2人しかいなかったのですが、今年は男子16人女子14人計30人の学年

です。当然のことながら、雰囲気も能力も、そして担任の先生の教育方針も全く異なっていて、同じ学校の同学年でもこれだけ違うのだと実感すると同時に、その違いを楽しみながら、総合、特活、道徳、生活指導、学年の校務分掌等を2年担当3人が協働し、日々新たなことに挑戦し続けています。生徒と教員がともに成長していけるよう、じっくりと取り組んでいきたいと思っています。

主幹教諭としての新たな船出

学校改革マネジメントコース2年／羽島市立羽島中学校 大野 隆次

今年度4月より、新任主幹教諭として現中学校に赴任した。主幹教諭という立場での赴任であるため、どれだけ学校マネジメントに貢献できるのかという不安を抱えながらのスタートになった。また、これまで新規採用以来、ずっと小学校での勤務だったため中学校での勤務に戸惑いを感じていた。まず、主幹教諭とは、どういう役職なのかを整理してみることにする。学校教育法では、主幹教諭の職務規程を次のように示している。

主幹教諭は、校長（副校長を置く小学校にあっては、校長、及び副校長）及び教頭を助け、命を受けて校務の一部を整理し、並びに児童の教育をつかさどる。

【学校教育法第37条9項】

主幹教諭は平成19年に制度化され、学校を一つのチームとして機能させるため、全体をマネジメントする管理職と教職員、専門スタッフとの間に立って、「チームとしての学校」のビジョンを始めとした意識の共有を図る、いわばミドルリーダーとしての役割が期待されている。「校長、副校長、教頭等の管理職の補佐」としての業務の中で、主幹教諭が担当している割合の高い業務は、「教育課程や生徒指導など、学校教育の管理に関わる業務の一部」、「保護者や地域住民との対応や折衝など、渉外に関わる業務の一部」などが挙げられる。

本校の主幹教諭の主な役割は、いじめ・不登校の未然防止、教育相談が中心となっている。生徒がよりよい学校が送ることができるように支援をすることである。しかしながら、不登校や登校を渋る生徒、教室に入れず別室で過ごす生徒、友人関係や家庭に悩みを抱えている生徒がそれぞれ存在している。学級担任を中心に、生徒指導主事、スクールカウンセラー、スクール相談員、スクールソーシャルワーカー、市教委など関係機関と連携してその解決に向けて方途を摸索しているところである。

中でも、私に課せられた責務は、新規の不登校生徒を出さないようにすることであると考えている。先日、全校生徒に取ったアンケートでは、「学校が楽しい」という質問に対して、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」の合計の割合が9割ほどあった。また、「主体的に授業に取り組んでいる」という質問でも同様の割合であることが分かった。大変嬉しい結果であると同時に、この割合を維持向上させていくことこそが、新規の不登校生徒を出さない最善の策でないかと考える。国においてはICT活用の視点を盛り込んだ「個別最適な学び」、探究的な学習や体験的な活動を通じ、子ども同士あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働する「協働する学び」の充実を掲げている。そのような学びに主眼を置

き、子どもたちが主体的に学べるような体制を校内に浸透させていきたい。

また、本校中学校区内の三つの小学校の兼務をしている。毎週、火、水、木の午後からそれぞれの小学校を訪問し、全校の授業参観をしている。そこで、頑張っている子や気になる子に声を掛けたり、放課後、担任の先生にその様子を報告したりして児童理解に努めている。昨年度末、主幹教諭の辞令交付にあたり、岐阜教育事務所長より「主幹教諭が子どもを見る視点は、いつも接している教員とは違うので、どんどん助言してほしい」というお話をいただいた。私が訪問

することで何かの参考になってもらえればと考えている。また、6年生児童は次年度本校に入学する子がほとんどあるため、情報共有を図り、小中学校の連携を図っていくことも責務の一つとしていきたい。

この4ヶ月間、主幹教諭として、まだまだ学校マネジメントに貢献できているという実感はない。教職員の信頼、そして何よりも子どもたちから信頼を得られるように、自分にできることを自分らしく誠実に取り組んでいく決意である。

『考え、学び続ける』学校を目指して ～責任、当事者意識、主体性を育むマネジメント～

学校改革マネジメントコース2年／福井市安居中学校 伊部 雅之

令和3年度が始まって、約4か月が過ぎた。今年度は、コロナの影響がないわけではないが、長期にわたる休校等がないことや、中体連の大会等も実施されたことを考えると生徒にとっても教員にとってもいろいろなことを実践できているのではないかと考える。

私は昨年度から、勤務する福井市安居中学校で研究主任という立場である。私は『考え、学び続ける』ということ 키워ドにして日々実践しているつもりである。ただここで改めて意識したいのは「だれが」考え、学び続けるかということである。そう、考え、学び続けるのは生徒であり教師である。私たちはよく「生徒にもっと考えるようになってほしい。」「最近の生徒は考えない。」などと言うことがある。でもそれは、私たち教師がそのような生徒に育ててしまっていると思う。そもそも考え、学び続ける生徒を育てようと思ったら、まずは教師が考え、学び続けている姿をみせなければならないと考える。本校の研究主題は「Agency を育む学び～共に創るプロジェ

クト学習～」である。Agency を「自ら考え、主体的に責任をもって行動する資質・能力」と捉え生徒 Agency、教師 Agency を育む実践に取り組んでいる。さて、先ほどの話に戻すが、生徒に Agency を育もうと思ったら、教師がまず自ら考え、主体的に責任をもって行動することができなければ生徒にもそのような資質・能力を育むことはできないのである。

今年度私は、特に教師 Agency を育むことに注力して本校での研究会を行っている。授業公開はもちろんであるが、公開するまでのステップとして自分が、それぞれの教科の授業においてどのような力を生徒に身につけさせるのかのセッションを行った。そしてそれをもとに授業構想を語り合った。研究会には教師はもちろん、生徒も共に参加し、語り合った。5月の教職大学院の月間カンファレンスでは実践報告をする機会をいただいた。その中でも研究会への生徒の参加は他の先生方にとってもインパクトはあったようである。ただ、私の思いとしては、自分が生徒に対して授業を実践していくのに、生徒に対して教

師の思いや授業構想を語ることができないようでは専門職としては失格だという思いもあったから、生徒を参加させたのである。

4月に令和3年度が始まって数か月、本校の研究会には教職大学院の先生方も参加していただき、教師、生徒、そして教職大学院の先生方が「共に」安居中学校のことを考えている。ただすぐに結果がでるわけではない。そしてこうすればいいという正解のやり方があるわけでもない。しかし、教師一人一人が今以上に「考え、学び続ける」ことでしか正解に近づくことはできないと確信している。教職大学院の先

生方と共に考えるが、やはり本校の一人一人の教師の資質・向上していかなければならない。私自身も一人の教師として、安居中学校の研究主任として資質を向上させていかななくてはならない。先述したカンファレンスでの実践報告では、マネジメントコースでの学びを、安居中学校に還元することも実践報告で語らせてもらった。今年度マネジメントコース2年目で最終年になるが、月間カンファレンス、集中講義を通して考え、学び、まずは自分の教師としての資質を向上させたい。そしてこれまでのように安居中学校に還元させていきたい。

個別最適な学びと、協働的な学びの実現に向けて

ミドルリーダー養成コース2年/関西大学中・高等部 宮崎 亮太

2020年8月に、とある歴史教育に関心を持つ教員や学生が集う研究会で歴史教育実践を報告した際に、参加した方から「先生の報告はあっちの世界の話だね。」と言われた。誤解を恐れず言うならば、「あっちの世界」とは、歴史研究を歴史教育に反映させることよりも教育手法や生徒の活動、評価など教育方法がしっかりしていれば、内容は必ずしも最新の歴史研究が反映された教育内でなくても良いと考えている世界の人びとという意味だろうか。確かにこの半年、アカデミズムと教育をどのようにクロスさせるかを悩みつつ報告したため、その言葉は非常に胸に刺さった。

もともと、2020年3月にその研究会は開催されるはずであったが、8月に延期された。言わずもがな、COVID-19の感染拡大が影響している。COVID-19の感染拡大によって全校休校措置がとられ、本校では2019年度学年末考査以後にオンライン授業が実施された。2020年度も5月までオンライン授業がおこなわれた。また、学校行事の多くが中止や変更などを余儀なくされ、学校のコミュニティのリズムをとるこ

とさえ難しい状況となり、学校という形が存続できるのか危惧する時期もあった。

これまでの学校教育のあり方が行き詰まり、大きな転換をしていくことが求められるなかで、従来の授業スタイルでおこなった授業実践を報告することにどれだけの意味を持つのか強く疑問を抱くようになった。本校では、学校が再開された後にオンライン授業を対面式授業で補うことはせずに定期考査を実施したところ、私が担当した科目では、従来と比較してそれほど差が出なかった。生徒にきいてみると、1度聴いてわからない部分は授業動画で何度も復習できたという生徒の意見が聞かれた。

こうしたことがあり、研究会数日前に報告内容を見直したところ、半年間に激変した教育環境を鑑みるに、3月当時そのままの歴史教育実践の内容を報告することに強い違和感を持った。それよりも3月当時と8月時点で、同じ歴史教育実践をどのように捉え直したのか。また、その背景や今後の自分の歴史教育実践のあり方や実践の捉え方が変わったことなどを報告したいと考えるようになった。

私は、2020 年度に経験したこうした様々な事象を通して、学校で教師と生徒が集って学ぶ意味を考えなくてはならない時に来ていると感じている。学校での授業は情報伝達のためにおこなっているのではなく、「できごと」を起こす場への転換が必要であると感じた。「できごと」によって対話を生み出し、教室空間の中で飛び交う情報を対話によって自分のなかを通し、知識へと変化させることが求められるのではないだろうか。対話を生み出す「できごと」にするためには、生徒たちの琴線に触れることが必要である。少数の生徒たちの心を動かすのではなく、多くの生徒たちが思考せずにはいられない仕掛けをすることが必要だと思う。私はこうした仕掛けには時に身体性をともなうような「遊び」が必要であると感じる。生徒たちと「遊び」を通して、ともに思考して、授業で取り上げたい概念などの情報に意味づけ、価値づけをおこなえるようにしたいと考えている。

では、このようなスタンスの変化は COVID-19 の感染拡大だけが原因であるかと問われるとそうではな

いと言えるだろう。これまで歩んできた教員としてのキャリアで悩み葛藤してきた部分が表出したと考えている。もっと言えば、なぜ自分が教員になることを目指したのか。そこから掘り起こして考えなければならない。しかし、それにはじっくりと自分と向き合う時間が必要である。まさに教職大学院でおこなっている自己内対話と他者との対話、長期実践研究報告書など書物との対話など省察することを繰り返し、これまでの歩みを振り返って、結節点に差し掛かっている今こそ、どのように今に至りこれからどこに歩もうとしているのかを一人で考え一人で完結するのではなく、教職大学院の皆さんを含めた自分に関わる全ての人びととともに考えて、「あっちの世界」と「こっちの世界」を往還しつつ、あと半年近く悩み葛藤し考えたい。『教職大学院 Newsletter』No. 147 の松木健一先生がお書きになっていることに大きな示唆をいただき、どちらかではない、自分なりのアカデミズムと教育のクロスを書き記すことを目標に頑張りたいと思う。

出会いと学びのとき

ミドルリーダー養成コース 2 年/カリタス幼稚園 西川 くるみ

早いもので、教職大学院での学びも後半に差し掛かりました。これまでの幼稚園改革の歩みと実践を振り返ってきたことを、今後の道標となるように紡いでいくことができるだろうか、確かな手ごたえを感じる瞬間もあるけれど、この場で学べるのもあと半年と思うと不安も押し寄せてきます。月ごとのカンファレンスをとおして、また東京サテライトで顔を合わせるたびに取り組みへの進捗を聞かせてくれる仲間刺激を受けます。私自身は、自分の実践として語れることは何か、自信をもって語れることなどないと思っていたけれど、聞き手の方に助けられながら精いっぱい言語化する中で、少しずつ自分が大事にしたいこと、してきたことが見えてきました。そうすると点と点がつながりをもっていることに気付かされるようになってきて、この教職大学院で大切

にしている省察的実践の意味が、本当にそうなのだとわかってきました。

カリタス幼稚園からは、この教職大学院に通うのは私で 3 人目で、6 年間で少しずつ、草の根からの改革が進み、現在はとても風通し良く、お互いの保育を開示しながら協働しています。

コロナ禍の休園でも、一人ひとりが一生懸命関わりながら子どもたちと繋がるために、得意を生かした様々なチームに分かれて取り組んできました。私も CD 制作チームとして、園でいつも歌っている歌や、届けたい歌などを録音して届けました。休園中、子どもたちは CD を聴きながら、幼稚園でやっているのと同じように歌ったり、祈ったり、踊ったりしていたそうです。保護者はそんな姿を見て、幼稚園との

つながりを感じ、成長を感じたとの感想もいただきました。CDは結局季節ごとに4枚、クリスマスの聖劇バージョンなどを作成し、家庭で楽しんでもらうだけでなく、みんなで歌えない保育の中で活用してきました。そんな繋がりから、先日「先生方による手作りコンサート」を行いました。コンサートに先立って、この春卒園した子の保護者で音楽学博士の先生に「カリタス幼稚園の音楽で育つ子どもたち」と題して講演をしていただきました。講演のためにインタビューを受け、普段保護者にはそこまでは語られない私たちの取り組みについて、音楽学博士の立場で講演の中で価値づけてくださいました。幼稚園改革の中で、取り組んできたクリスマス会の発表の内容、そこに向かっていくための種まきと子どもたちの活動を経ての発表会、子どもたちの成長を、保護者の立場、音楽学博士の立場から価値づけていただけたことは、とても励みになりましたし、言葉にさせていただくことで、園として、教師としての私たちの願いがはっきりと認識できました。その後のコンサートは、CDチームをコアメンバーとして企画立案し、子どもたちが園で親しんでいる曲を中心に、観たり聴いたり、一緒に（やさしい声で）歌ったり踊ったり、飽き

ないように工夫しながら楽しい時間を持つことができました。私たちが聴かせるのではなく、一緒に楽しむ、つながる、分かち合うことができたコンサートとなりました。

コンサートもそうですが、現在のカリタス幼稚園には様々なところで協働してポジティブな空気があります。園内研修としてのラウンドテーブル形式でやってみたいといえ、**「よし！やってみよう」**となっていて、具体的な計画に進みます。少しのエネルギーで実現することができます。幼稚園改革も進んできているので、パイオニアの苦労を私はしていませんが、ポジティブな流れに乗って、私にも結構ここでできることがあるかもしれない、と思えるようになってきました。教職大学院で、お互いの取り組みを共感的に聴き合うこと、その中で自己開示をすることで、自分の中の核がはっきりとしてくる、このような営みを園に持ち帰って、これからも邁進していきたいと思います。

金曜カンファレンス報告

学びのための集団へと変化してゆくその中で

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 **岩城 つばさ**

本項では、金曜カンファレンスにおける「社会を創る力を培うカリキュラム構想」を一年間のテーマとして進めている授業づくりの時間について述べていきたい。

授業づくりの時間は、一年間を一つの単位とした大きな流れの中で進めているものであり、本格的な授業づくりとその評価は後期からを予定している。そのような大きな流れの中で、前期の活動を捉え直すと、本格的な活動に入るための大切な準備期間であったと考える。その準備期間の中で私が印象的で

あった時間が、『授業研究/木村優・岸野麻衣編』を参考図書として進めた授業記録に関して捉え直すための時間であった。この時間は4～5人のグループに分かれて4週分活動を行ったのだが、活動の内容は各グループの裁量に任せる形であった。そのような中で、私たちのグループでは自らの授業記録を公開することによって記録から授業に関する視点を明らかにするあるいは、捉え直すことを大きなテーマとしながら活動を進めていった。ここで、話が初めに戻ってしまいが、前期に行った授業づくりの為の様々な活動の中で、『授業研究』を参考図書にして進められた4週間のグループ活動が私の印象の中に深く残った理由は、個人の学びに収まることのない、グループで協働して学びをつくっていかうとした過程の中での気づきや、その気づきをもとにしたグループのメンバーの考えの変容を感じることができたからであったと振り返る。

ここから、簡単にではあるが、私たちのグループの4週間の学びの展開について述べていきたい。グループメンバーが集まって初日であった1週目では、参考図書である『授業研究』を参考にしながら、メンバーそれぞれがこれまでどのように授業を観てきたかについて話し合った。その話し合いの中では、「クラス全体での様子を見ている」「子どもに知識が身についているかどうかをみる」「子ども達の対話を中心にみている。」などが挙げられ、授業について観察する対象や注目して観る動きが、それぞれ全く違っていたことに驚かされているうちに1週目の活動が終わっていた。2週目には、グループの中の3名がインターン先での授業記録をグループの中で公開して、参観者がどのような視点で授業を見ていたのか、また、授業記録を見て何が伝わってきたかなどの事について話し合った。ここで、私や他のメンバーに、想定していなかった感情が沸き起こる。授業記録の検討が、「つまらなかった。」のだった。なぜ、記録を持ち寄ってグループで検討することが、つまらなかったのか。その疑問を解消すべく、M2同士オンライン上で集まり話し合い、今後の見通しを立てたが、ま

だ少しモヤモヤが残ったままだった。このとき感じていたモヤモヤの原因が3週目に明らかになったのであった。3週目も2週目と活動内容に大きな変化はなく、自分の授業記録をグループ内で公開して話し合いをした。ここで公開された一人の授業記録が、グループメンバーそれぞれが記録について捉え直す大きなきっかけとなる。公開された授業記録からは、その場にいた子どもの姿がこちら側に伝わり、参観者が観ようとしていたであろう、子どもが一つの授業の中で学んでいく過程に私たち記録を見た者を引き込もうとしているような記録であった。このような記録がグループの中で共有されて初めて、2週目に感じた「つまらなさ」の原因が、授業の中での子どもの捉え方の違いや、参観者が明らかにしたい事実と実際に記録として残しているものとのつじつまの合わなさであった事に気が付かされた。このグループでの活動が最後になる4週目には、M3の院生の授業記録を検討した後、4週間を振り返るために、自分が何に悪戦苦闘したのか、自由に言葉にしてもらった。その中では、「自分の記録に関して言語化でき、考えるきっかけとなった。」、「今までは集団として授業を見ていたけどピントがぼやけていたことに気がついた。人間関係や授業の時間以外の姿を見てみようと思った。」といった声が聞かれた。

4週目の振り返りにあったような自分の授業の見方に関する視点を捉え直すきっかけとなったのは、グループで自分たちの学びを探り続けることができたからであると私は考える。協働での学びは常に不安定であるからこそ、たまに「つまらない」と感じてしまうからこそ、何とか自分たちの学びにしようと模索し続ける。授業記録にグループで向き合った4週間は、一人で参考図書と見つめ合っていると感じることのできない、自分の気持ちの揺らぎや不安、不安を越えて自身の考えの変化に気が付いた時の高揚感を味わうことができた、苦しくも充実した時間であった。そして、協働での学びの世界に足を踏み入れたからこそ、前が見えないほどの奥深いその中を進んでいかなければならないと思う。

今、思っていること・考えていること

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

太刀川 京

昨年度とインターンシップ先が変わり4ヶ月が経った。朝5時に起きてアイスコーヒーを飲む。晴れていたなら自転車で、雨が降っていたら徒歩で学校へ向かう。職員室に入り、挨拶をして2年1組へと向かう。「今日の授業の反応はどうだろうか」「どんな表情で学校に来るのかな」と考えながら授業の最終準備に取り掛かる。7時25分になり最初の児童が登校する。「昨日、タイピングを練習してきた」「今日の体育のトレジャーゲームが楽しみ」今日も元気な様子だ。7時40分になり続々と子どもたちが教室へ入ってくる。「おはようございます。」声のトーンは様々だ。宿題の丸付けをしていると子どもたちが寄ってくる。「今日の宿題、簡単だった」「今日進んで勉強してきたの、見てみて」今日も子どもたちは元気な様子だ。メンターの先生の授業での子どもの様子を見取る。メンターの先生の発問・授業展開は子どもたちが惹きつけられる。発言や活動も活発で書くことにも一生懸命だ。聴く姿勢は発言者の方向を向いている。算数の授業中、「えー、それはずるい」「でもさ、」「だって」と子どもたちの声。「え、何?」と挙手を求める自分。「あ、そうゆうことか」という声を聴くととてもうれしい気持ちになる。給食の準備は給食当番が急いで準備し、当番がクラス全体に「静かにして」と声をかける。給食後、掃除をして5時間目が始まる。5時間目が終わり、子どもたちが下校し始める。「さようなら。」「また明日。」、その日の子どもたちの気分が乗っている声に返答して「さようなら。」と返す。放課後、メンターの先生と今日の出来事を話す。子どもたちの頑張っている様子、授業での悩み、これからの授業に向けて等々だ。

附属義務前期課程で講師兼インターンシップをさせていただく中で、教員はとても創造的な仕事だと

感じる場面が多々ある。例えば、メンターの先生の体育の授業実践での進め方だ。子どもたちがボールを投げるだけの活動ではなく、どうすればもっと上手く投げられるのかを自分でそして仲間と共にアドバイスする時間を設けている。また、試合をした際には振り返りを書く時間も設けられ、子どもたちは真っ白な紙に身についた力、今後付けていきたい力を書き進める。それを体育の授業最初に共有し、活動―議論―活動―振り返りが行われる。

自分が算数の授業を行っているとき、子どもたちは自分が考えていなかった言葉を口にする。例えば、「1〜4の数を1回ずつ使って2桁―2桁の引き算を作ります。一番小さくなる答えは何ですか」と発問し作業を子どもたちがする中で「マイナス使ってもいいですか。」という声を聞いた。答えは「9」と言い張る子、「7」だと言い張る子。「グループで協力して作った引き算の答えが小さい順に並べてみよう」と子ども達に投げかけると「ほんとだ、一番小さい答えは7だ」と言う声。「他の数を使ったらどうなるの。」という声。子ども達が考えることは本当にすごいなあといつも感じている。

自分が行っていることに全て意味を持たせたいと思っている。これは先日、教頭先生から頂いたアドバイスだ。福井県でコロナの拡大警報が出たため検温を玄関前で行うことになった。その際にただやっているのか、それとも子ども達の名前を全部覚えてやるという気持ちで行うのかで行動が変わってくる。朝、玄関に通る前の子ども達の声・表情はマスク越しではあるが毎日微妙に違う。なるほど、先生達は毎日このようなことにも意識されながら子ども達と関わっていらっしゃるのかと新たな学びを実感することができる。

毎日学校に通わせていただいているからこそ、毎日を学びのあるものにしていきたいと思っている。子ども達の声は毎日様々だ。授業の様子も教科によって得意・不得意があり、毎日見せる顔が違う。毎日が違う、創造的な仕事であることをこの4ヶ月間で

感じている。この創造的な仕事の中で「子どもたちが主体的に取り組む授業とは何か」「子どもと教員が共に創る授業は何か」を講師兼インターンシップで学ばせていただきながら、授業実践に取り組んでいきたい。

ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions 振り返り

持続可能なコミュニティづくりのために

学校改革マネジメントコース2年/美浜町立美浜東小学校 大野 靖幸

今回、ラウンドテーブル 2021 SUMMER SESSIONS に Zone C 「持続可能なコミュニティをコーディネートする」に参加した。今回、ラウンドテーブルに参加するのは、三回目になるが、これまでも、職種や校種の枠を離れ、そこでは、多様な考え方や意見を聞くことができるので、普段の合同カンファレンス以上の楽しみがあった。

セッション1では、福井大学国際地域学部の話提供があった。その中で特に印象に残っているのは、過疎化の背景には、4つの空洞化(①人の空洞化②土地の空洞化③むらの空洞化④誇りの空洞化)があるということだ。特に4つ目の空洞化は、住民が、そこに住む意義や誇りを失いつつある状態で、心の過疎と言われている状態であり、一度そのような状態になってしまうとなかなか活性化を図ることは困難になっていくのだという。自分が住んでいる美浜町も、消滅可能性都市に指定されている中で、誇りの空洞化に陥っている部分があると再認識させられた。「自分の生まれ育ったところに興味関心がない。」「自分の住んでいるところに誇りがもてない。」若者だけでなく、長い歴史を創り上げてきた年配層にも、地域活性化へのあきらめ感が否めない場所になりつつある。

そのような現状の中、大学生がPBL活動を通じて、地域活動に参画し、地域住民とともに活性化のお手伝いをするというものであった。誇りの空洞化が進む中で、地域の中だけで、活性化策を掲げ、それを推進していくだけのエネルギーは、もうどの集落にもないと考えたときに、弱りつつある地域コミュニティにエネルギーがある大学生やNPOなどが参画していくことは今後非常に大きな意味をもつと感じた。美浜町も『新たなつながりを築く交流の拡大』を美浜創生総合戦略の中に位置づけ「関係人口」の増加を図ろうとしている。地域と行政が一体となって、新たな関係づくりを構築しながら、新しい町づくりを進めていくことが重要だと感じた。

また、セッション2の葛塚中学校の取組では、持続可能なコミュニティ作りで大切なことは、そのコミュニティに「おもしろさ」があるかという点だということに共感した。「今まで誰もやったことがないことを地域の方とともに作り上げていくPBLだからこそ価値がある」まさにおもしろさは持続可能なコミュニティを構築する上では、必須なことだと感じた。前年踏襲している活動では、子どもに感動体験は与

えられない。そういった視点をもちながらPBLを作り上げていくことの重要性を痛感した。

今回、Zone Cに参加させていただいて、前回のラウンドテーブルと同様に大きな「学び」を得ることができた。消滅可能性都市にある小学校に勤務する自分にできることは、町と行政と関係人口との関わりの中に小学生のコミュニティを持続可能な形で参画させることである。それは、現在進めている三校合同

での総合的な学習の時間でのふるさと学習を中心としたPBLである。子どもには、4つの空洞化を止める可能性が十分にある。それぞれのコミュニティを融合させるのが教師の務めであると考え、子ども目線の活動を今後も進めていきたい。

今回、実践報告をしていただいた方々、本当にありがとうございました。

多様な先生たちと共に学び続けるコミュニティを培う

ミドルリーダー養成コース2年／長野県岡谷市立川岸小学校 久保田 美千代

学校長から「ミドルリーダー養成コース」で受験するよう言われ、学び始めて1年が過ぎた。思い返せば、教職大学院で学び始める前から市の「中堅職員研修」に参加するよう声をかけられ、市内全教職員が集まる夏期休業中の悉皆研修ではファシリテーターに指名されるようになった。自信も経験も知識も熱い想いもないのに研究主任を任されるようになった。いつからか、自分の意志ややる気のようなものとは関係なく、「中堅」「ミドルリーダー」という立場に立たされていた感覚がある。「立場が人を作る」という言葉を聞いたことがある。私は立場を与えられ、次第に自分の考えや想いを強く持つようになり、校内に自分の考えを発信することも増えていった。教職大学院での学びが少しずつ自信にもなり、発信することの後押しをしてきているようにも思う。今年度は20代の若い職員が増え、若手の先生の授業や学級経営を見ながら「私だったら、もっと違う授業展開を考える。」「あの子への支援は、もっと別の方法が良いのでは。」と考え、「あの先生が自分の至らなさに気づくために何て声をかけようか。」「なんとかして自分の経験や学んだことを伝えてあげなくては。」と、勝手に一人で悩む日が増えていった。研究主任なんだから、ミドルリーダーなんだから若手を育ててあげなくてはならないのだ。そのためには自分の実

践や考えを伝えていかなくては。誰に言われた訳でもないが、私はいつの間にかそんな考えをしていたように思う。無意識のうちに私は傲慢でトップダウン的なミドルリーダーの思考に陥りつつあったのだと恥ずかしく思った。私がこのように気づくことができたのは、二日間のラウンドテーブルのおかげである。

私はZone A1 A2に参加した。Cross sessionで同じグループになったストレートマスターの学生はインターン先の学校で周りの先生から言われた「子どもと同じように先生も見なくちゃダメだ。」という言葉から考えたことを語ってくれた。彼女がその一言から深く思考し、自分のあり方を見つめ直していることを聞きながら「若手は未熟で私が何かを教えてあげなくてはならない存在」と捉えていた自分を恥ずかしく思った。若手の先生こそ、私以上に悩み考え子どもに接しているのだろう。そして、私自身が子どもと先生を別物として捉え、「子どもは自ら成長する力をもっている存在」「若手職員は、経験のある職員が教え、育ててあげなくてはならない存在」と接していたことに気づいた。私は子どものことは待てるつもりである。その子が「考えたい」と思えるようにタネをまき、授業形態を工夫する。しかし、先生のこ

ととなると、待てない自分がいた。私は授業で見せた子どもの姿を伝えながら、その子への支援を担当の先生と考え合っていたつもりであった。しかし、担任からはっきりとした考えが聞けない場合に、自分の考えを一方向的に伝えていたように思う。答えを出すことを急いでいたのかもしれない。経験の浅い担任の先生がその子への支援方法を考える時間を待つことをしていなかった。担任自身が考えられるような言葉をかけていなかったようにも思う。シンポジウムでは小浜市教育委員会の小坂恵先生が、支援会議では担任が能動的に考え、素直に話せる空気づくりに取り組んでこられたことを話してくださった。担

任がマイナス感情を出し合えることを大切に、「聞いて聞いて問いかける」ことを意識してきたという。この言葉が自分に突き刺さった。自分の考えや経験を伝えるだけのミドルリーダーではなく、多様な先生方と共に考え悩み成長していく、そんな伴走者としてのミドルリーダーでありたいと思った。ミドルリーダーにはいろいろな側面が必要とされるのであろう。リーダーでありコーディネーであり伴走者でもある。その時々によどのような役割を果たせばよいのか、その見極めが必要なのかもしれない。大切なことに気づくことができた二日間であった。

Round Table Report

ミドルリーダー養成コース2年/小浜市立小浜第二中学校 Tjipto, William

The Round Table in June was a two-day affair with the first day broken down into various Zones, each with a different focus and discussion topics. On the second day, I was set to make a presentation about my first year at Fukui University. Although differing in content, I learned greatly from various aspects of each day.

For the first day, I was intrigued by the Zone A group, which was about inclusive schools and helping special needs or a range of different students. The need for inclusion and taking special note of students of all needs are more important than ever before, requiring unique skills and empathetic awareness in the teachers. While my job as an ALT teaching English often does not coincide with some of these students' goals, the chance to interact with a foreign person may be a rare opportunity for them. My school also has some special needs classes which

I usually attend, so I have a little bit of experience in the area. Since I also joined other zones prior, I felt that maybe I could learn more about educating a wide range of student abilities and needs.

There were three speakers in the main room and each discussed different aspects and experiences in teaching. I personally found the first speaker, Matsumoto-sensei from Nagano, quite informative. Her presentation focused on the connections between her students and nature, bringing living things into the classroom and interactions with the school's pet goat. Her topic was very in-depth and I got some interesting hints for my practice. In particular, she referenced an "H-kun," and his growth through her practice. He first started off negatively, but soon through help from the teacher, was able to grow into a project leader. This progression was impressive and led me to

think about the importance of focusing on the growth mindset for my own students.

After the three presentations, we split into Breakout Rooms for our discussions. I realized that Zone A was deeply challenging for me because I had to think a lot more about an aspect of teaching I was not fully familiar with, but it was an excellent experience for me. The teachers in the group were extremely supportive of my comments and were very helpful in assisting me to understand some of the more interesting points. The discussion was lively and a major theme of the discussion afterwards focused on students' feelings and growth as an important aspect to understanding how effective teaching is.

For Day 2, I prepared a presentation about my practice and thought about my immediate plans for this year as a second-grade student. Knowing I will join the English group for the presentation, I was able to think about my practice a bit more deeply in preparation. I was the first to make a presentation to the group of global teachers. I was a little worried knowing that almost all the participants were from outside Japan, therefore I made sure to include a bit more information that Japanese

teachers would otherwise already know. Learning a bit from my first presentation in February, I also talked more about the readings in summer that had a great influence on me and about how that applied to my project at the end of my first year. This way, my project and plans were more the focus of my discussions. While it felt long, I certainly did not feel like I talked for a whole hour.

Afterwards, there was a bit of feedback and questions from the other members. I was glad to see responsiveness from some members about my presentation which made me feel there was more useful information conveyed this time than prior. My presentation and discussions this time were much smoother and had more relevant information for the listeners, and, as a result of focusing on fewer things deeper. I felt that I was able to share more of my practice with them, hopefully adding to everyone's collaborative learning. I felt in some ways I could interact and add my opinions during both days more than in previous meetings, despite the Zone A topics and my long presentation being quite challenging for me. And through the Round Table, I felt that I was able to learn a lot and reflect upon my practice.

ラウンドテーブルで得たもの ―仲間―

学校改革マネジメントコース M2／越前市武生西小学校 川端 宏明

「このメンバーはもう仲間です。」私の拙い実践発表の事後討議の中で、グループのファシリテーターを務めてくださった奈良女子大附属幼稚園の松田先

生が仰ってくださった言葉である。私は、今年度初めて教務主任という立場になり、併せて研究主任も拝命することになった。このことを言うと、ありがたい

ことに、多くの先生方が「大変ですね。」と心配してくださる。しかし、私自身は元来、前向きと言うと聞こえはいいが、楽観的な性格なので、むしろチャンスと捉え、今まで出来なかった新たなことにチャレンジ出来るかも！と、ワクワクする気持ちの方が大きい。教務主任と研究主任という立場から、先生方の働き方を見直すお手伝いをし、そこから生まれた心の余裕をベースに、子どもたちへの質の高い教育実践に繋げていくという「芯」を大切にし、毎日を楽しみたいと思っている。

と、理想は高く掲げてはいるが、現実はなかなか見通しが持てず、後手に回ってしまい、先生方を混乱させてしまったり、思いだけが先行してしまい、現場の先生方に上手く伝えられずに負担だけをかけてしまったりと、反省することも多い。そういう時は、さすがの楽観的な私でも、上手くいかないことに、人並みに悩んだり、落ち込んだりするのだが、弱った私を支えてくれるのは、いつも思いを共有できる仲間である。

毎回のカンファレンスをはじめ、教職大学院で先生方と話すことが本当に楽しい。それはきっと、それぞれが取り組んでいるテーマは違っていても、根っこにある「今よりもっとよりよい教育実践をしたい、めざしたい」という思いは同じだからだろう。そのために自分を成長させたいし、学びたい。そういう思いがどの先生方からも感じられることで、刺激を受け、多くのことを学ぶことで視野が広がり、励まされて勇気をもらい、明日からも頑張ろうという気持ちにさせてもらえる。今回も、松田先生をはじめ、グループの先生方からたくさんのことを学ばせていただき、背中を押していただいた。私の発表を、伴走者としてあたたかく受け止めてくださった先生方の言葉の数々、先生方の実践発表を聞いたからこそ考えたこと、それらによって散らばったピースがまとまっていくかのように思考が整理され（まだまだ、い

ろんなピースは散らばったままですが）対話の前には見えていなかった世界を、ほんの少し見ることが出来るようになっていくことが楽しくて仕方がない。こんな有意義で貴重な時間を過ごすことが出来たのは、「仲間」のおかげである。

現場の先生方は、日々本当に様々な課題に直面し、必死にそれらの課題と向き合っている。時には余裕がなくなり、身も心も疲弊している（ように見える）先生もいらっしゃる。そういった先生方に、「〇時出勤」や「残業時間〇時間」など、時間的なことだけを伝えても余計にプレッシャーとストレスを与えるばかりで逆効果でしかないだろう。先生方一人一人の能力に丸投げしているだけでは、いつまでも現状は変わらない。また、いくら早く帰ることができても、同時に子どもたちへの情熱まで削がれてしまうのでは、なんのための働き方改革だろうか。すべての先生方が子どもたちとの毎日を楽しめるようになるために、自分には何ができるのか？先生方に心の余裕を持ってもらうにはどうすればよいのか？先生方のために、今何ができるのか常に自分に問いながら、先生方の伴走者となって一緒に見直していきたいと思う。そうして先生方との信頼関係を築いていき、互いを支え合える仲間として認め合い、いつの間にか先生方同士が互いの伴走者になり得たとき、居心地の良い、働きやすい職員室が生まれるのだと思う。そんな職員室を想像すると、やっぱりワクワクする。

ラウンドテーブルでの2日間を通して多くの先生方と語り合う中で、教務主任1年目ではあるが、いや、1年目だからこそ、失敗を恐れずチャレンジし続けたいと、あらためて強く思うようになった。そんな風に思わせてくれた素敵な仲間に感謝したい。そして、自分もまた誰かをそんな風に思わせることができたとするなら、自分をほんの少し褒めてあげたくなる。2日間、大切なことを教えてくださった仲間にかから感謝したい。本当にありがとうございました。

出会いを通して生まれる学び

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市丸岡南中学校 荒木 裕里香

私自身、4度目の参加となったラウンドテーブル。大学4年時に初めて参加したラウンドテーブルは、新型コロナウイルスの流行前であったため、対面での開催でした。大勢の参加者が福井大学に集まり、各テーブルを囲み、それぞれがそれぞれの実践を聴き合い、語り合う、それまでに体験したことのない空気感の場でした。大学生であった私にはそれが新鮮で、その不思議な空気感に圧倒された思い出があります。大学院に入学してからの3回は残念ながらオンラインでの開催となっていますが、対面とはまた違った、しかし、良さは受け継がれたものになっていると実感しています。何百人を超える参加者がオンラインで繋がり、また県外からだけでなく、国外からも容易に参加でき、出会いの場としての機能は今まで以上にパワーアップしたのではないのでしょうか。また、対面で開催されるときは、どうしても他のグループの声が聞こえてきてしまう状況でしたが（それはそれで良さではありましたが）、オンラインになったことで、自分のグループにどっぷりと浸かって語り合いができるというのもオンラインの良さだと実感しています。

1日目はZone A「学校/インクルーシブ」に参加しました。「21世紀の学びを実践する教師の学修コミュニティを培う」というテーマのもと、様々な校種、職種の方々の実践を聴き合い、語り合うことが行われました。実践報告では小学校、教育委員会、特別支援学校、高等学校と異なる立場の先生方の報告を聴きました。小学校での丁寧な見取りに基づく授業づくり、校内支援会議の体制整備で見えてきた課題、不登校経験者に対する学校復帰の支援、通級による指導の充実など、とても興味深く面白なお話を聴くことができました。午後からのクロスセッションで

は、子どもたちを支える組織づくりを中心に語り合いが行われました。その中で、私がインターン生としてできることは、子どもたちの自己肯定感を上げるために、子どもたちを受け止める存在になることであるということを発見できました。

2日目は実践報告を行いました。主に昨年度のインターンシップの内容を中心として報告し、2年目で取り組んできた(いきたい)ことを報告させていただきました。報告をするためにまとめ直したことと、また、先生方からコメントを頂いたことから、もっと自身の指導観や授業観の軸となるものを確立していかなければいけないと感じました。また、軸となるものは持ちつつも、それを子どもたちに押し付けるのではなく、目の前の子どもたちに合わせて柔軟に対応し、変えていくことのできる力を身につけ、引き出しを多く持つておくことが重要だと実感しました。自身が実践を語ることによる学びだけではなく、他の先生方の実践報告を聴くことでも学びが生まれました。高校での「自分の意見が学校を変える」という実感を得させるために、自分たちのことは自分たちで話し合って決めるという仕掛けを工夫されている実践や、幼稚園での、子どもたちが主体的に学んでいける環境づくりの実践など、普段は聴くことのできない実践を、試行錯誤されながらやられている先生方のお話は、今後私が考えていけないといけない問題に気づかせてくださるとともに、先生方の頑張りに勇気をもらえた場となりました。

2日間のラウンドテーブルを通して、多くの学び、気づきを得ることができました。沢山の方々とこの出会いから生まれた学びが着実に私の力になっているという確信を持つことができた2日間となりました。

連合教職大学院のパンフレットがリニューアルしました！

実践し 省察する コミュニティ

～二年間の学びの
流れと仕組み～

福井大学連合教職大学院は、
21世紀の学校教育を担う教員の
専門性を高めるために、
様々な取り組みを通して
学びを深めています。
1年間の活動を紹介します。

福井大学大学院 連合教職開発研究科
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学（連合教職大学院）

多様な拠点・メンバーが
各学校にて実践・探究・
省察を進めていく
学校拠点の教職大学院

各拠点を基盤とした
分散型のコミュニティが
多重に編まれることで
院生の学びを保障しています。

お問い合わせ
福井大学大学院 連合教職開発研究科
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学（連合教職大学院）
〒910-8507 福井市文京 3-9-1 TEL: 0776-23-0500(代)
E-mail: dpd@fukui.ac.jp

教職大学院 2年間の学びの流れとしくみ

実践事例と理論に基づいた省察と再構成を積み重ねながら、学校における組織的・協働的な取り組みにより、教育実践力と組織マネジメント力を培います。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
年間行事とその概要	月間カンファレンス(5P) 県内外の現職教員院生、県外からの派遣教員、学部卒院生を交え、互いの実践やこれからのビジョンについて語り、省察、省察を深めます。	ラウンドテーブル(6P) 県内外、県外の現職教員院生、県外からの派遣教員、学部卒院生を交え、互いの実践やこれからのビジョンについて語り、省察、省察を深めます。	集中講座(夏期)(7P) 実践記述・組織論の検討、実践の執筆を行います。	月間カンファレンス(8P) 県内外の現職教員院生、県外からの派遣教員、学部卒院生を交え、互いの実践やこれからのビジョンについて語り、省察、省察を深めます。	集中講座(冬期)(9P) 実践記述・組織論の検討、実践の執筆を行います。M1生は「1年間のまとめ」、M2生は「長期実践報告」に向けて学びます。								
現職教員院生と学部卒院生の学びのイメージ(2,3P)	現職教員院生	院生はそれぞれの勤務校で、授業づくり・授業実践・授業研究・学校組織マネジメントといった自分が設定したテーマに取り組めます。大学教員のスタッフは、各勤務校にチームとなって、出向き様々な支援を行います。	学部卒院生	県立校、連携校におけるインターン生としての活動を通じて、教員としての学びを深めます。毎週行う、遠征カンファレンスでは、インターン先で6年8月の振り返り、院生で決めたテーマや公教育改革の動向についての議論を学びます。									

通年

学校での実践を支える

拠点校方式を採用する福井大学では、大学教員がチームとなって院生が所属する学校に出向き、授業づくり・授業実践・授業研究・学校組織マネジメントといった学校にかかわる様々なことについて支援します。自分の現場に基づき考えることで、確かな実践と研究が生まれていきます。

また、授業研究・教職専門性開発コースの院生は、毎週木曜日に院生に集まり、インターン先での学びの振り返りや院生が企画したテーマ毎のカンファレンスで自分の思いを語り、聴く、話す機会を設けています。さらに、公教育改革の動向等についての議論を学びます。

校内研究会
学部卒院生と現職教員の振り返り
学部卒院生によるインターンの学びの振り返り
県立福井の合同研修研究会

学校改革
長期実践報告
ラウンドテーブル
集中講座
カンファレンス
M1 M2
年間カリキュラム

実践と理論の往還で学びを積み重ねる

Schedule

8/29 Sun. 第1回大学院入試説明会
10/16 Sat. 月間カンファレンス A 日程

9/25 Sat. 第1回大学院入試
10/23 Sat. 月間カンファレンス B 日程

福井大学連合教職大学院 第1回入試説明会

令和3年

※オンラインにより開催します。
第2回(最終)説明会は12月26日(日)開催予定です。

8/29 日 13:00-

13:00からの全体説明のあと、
概ね14:00から個別相談となります。

教職開発専攻
 授業研究・教職専門性開発コース
 ミドルリーダー養成コース
 学校改革マネジメントコース

●オンライン (Zoom利用)
 ●新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、オンラインによる開催となります。

学生募集日程

令和4年度 第1回募集
 ※第1回は、授業研究・教職専門性開発コースのみの募集です。
 出願期間: 9月8日(水) ~ 9月14日(火)
 試験日: 9月25日(土)
 合格発表: 10月6日(水)

令和4年度 第2回募集
 ※第2回は、全3コースでの募集です。
 出願期間: 1月19日(水) ~ 1月25日(火)
 試験日: 2月5日(土)
 合格発表: 2月14日(月)

過去問を
入手できま
す。

募集要項を
入手できま
す!

出願を考えている方、関心のある方は、お気軽にご参加ください。

※参加希望の方は、必ず事前にEメールで入試課に連絡(氏名、住所(資料送付先)、電話番号、所属、志望コース)してください。後日zoomのURLとパスワードをお送りいたします。

福井大学学務部入試課

電話番号 → 0776-27-9927

入試課メール → g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

格致によりて 人と社会の未来を拓く



教員免許取得プログラム (推薦選抜を除く)

授業研究・教職専門性開発コースの入学前、教職に対して強い意欲を持った者に、小学校、中学校、高等学校(取得出来ない免許もあります。)又は特別支援学校の教育免許取得の道を拓くものです。授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割納入することになります。

【編集後記】今回も新しい院生やスタッフの自己紹介が続きます。自己紹介に於いても、院生報告、ラウンドの感想のいずれに於いても、皆さんの今までの実践や、考察が丁寧に書かれています。ニュースレターの編集を担当するにあたり、読み返させていたく度に、皆さんの思いに触れ、心強く励まされています。これからも学びの意義は勿論ですが、学び続けることの楽しさも共有出来る内容にしていきたいと思っています。(A・T)

教職大学院 Newsletter

No.151

2021.8.20 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp

福井大学大学院・連合教職大学院 〒910-8507福井県福井市文京3-9-1 TEL.0776-23-0500 (代表)